

現場から感じる ワーケーションへの期待と拡がり

—新たな関係構築の潮流がつくる交流と学び、そしてプロジェクト—

株式会社ふるしきや 代表取締役 田村 英彦

社会・地域課題の解決や未来づくりに繋がる事業を「まとめる」専門家として活動する、株式会社ふるしきやは、長野県千曲市を中心に長野県各地をつなげるワーケーション事業を2019年から展開している。事業を展開する中で強く感じるのは様々な人が“コワーグ”（一緒に働く空間を共有すること）することの価値である。ワーケーションという仕事とプライベートが溶け合う環境によって、ワーケーション実践者自身の「自然体での振る舞い」が現れる。お互い住む地域もワークスタイルも違う人同士へ興味関心が自然と生まれ、深く多面的なつながりが生まれる。これは私がまちづくりに関わってきた中で、新たな関係構築の潮流であると感じている。そして、現在コロナ禍に見舞われる社会において「ワーケーションを取り入れることで自分もしくは周りの人達の働き方をより良くしたい」「地域活性に繋がる新しいムーブメントになるか」という想いや期待感も感じている。ここでは、私がワーケーション事業を通して得た生の実体験に基づいたワーケーションの可能性について論じたい。

1 コロナ禍で急な認知度向上を見せたワーケーション

ワーケーションとは「ワーク（働く）」+「バケーション（休暇）」を合わせた、主に休暇で訪れる地域で働いたり、積極的な休養を取ることを指す造語である。

株式会社ふるしきやが長野県千曲市、そして他事業者と協働してワーケーションに取り組むことになったのは2019年の夏。長野県が信州リゾートテレワークを推進し、千曲市としてもこの流れで何か新しいコンテンツを始めたいとのことで始まったのがワーケーションであった。第1回体験会を千曲市が主催する形で行い、翌年2020年度からは株式会社ふるしきやが主体者となり、行政がサポートする形に形を変えて事業が進んでいる。現在、体験型のイベントはこの8月までに7回・計40日を数え、延べ250名ほどが参加し、リピーターの人も多く、イベント開催時以外にも個人ワーケーション実施者も増えてきている。そして参加者からの持込企画も増えていき、新しい地域資源の活用が進み、

写真1 ワーケーション体験会での集合写真



新しい視点が持ち込まれることで地元の参加者も増えてきている。

2 人にもまちにもプラスになるワーケーション

ワーケーション事業を進めるにあたって最初から最も大事にしていることは「関わる人全てにメリットを」という配慮といわゆる「お節介」である。千曲市は長野県の北信地域に属し、2,000名が宿泊可能でローカルグルメが軒を連ねる戸倉上山田温泉と、新幹線の駅は無いものの、JRと私鉄であるし

写真2 文化遺産にもなる棚田の絶景ポイントを
働く場所として開放

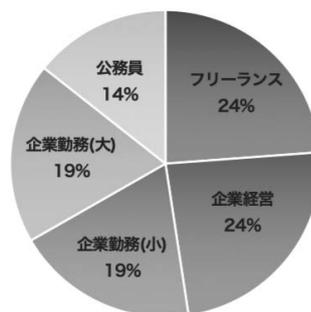


なな鉄道が新幹線の駅から直接乗入れ、また首都圏・中京圏・北陸圏から繋がる高速ジャンクションも存在する交通の要地である。私自身も2017年にいわゆる東京から千曲市に移住し、新型コロナウイルスの影響がでるまでは首都圏や関西圏との定期的な移動をしながらプロジェクトを推進するスタイルで働くノマドワーカーである。ワーケーションに来る人、宿泊施設や飲食店などの受け入れ事業者、受け入れを考える当社、行政や観光局を含めた企画側のメリットを全て考えたコンテンツとして羽ばたく可能性を当初から感じていた。もともと千曲市にはコワーキングスペースが2019年時点ではなかったこともプラスに捉え、街中を働く場所とし位置づけ、絶景の棚田の尾根や休憩所、開放的な河原、自社仏閣や山城、旅館・ゲストハウスに公共施設など、滞在が快適な場所を全てワークスペースとして捉え、まちなか回遊式のコンテンツとして昇華させている。滞在する側もより地域のことを知れて滞在体験の充実にも繋がり、受入側にとってもステークホルダーに対する偏りをなくすことに作用している。

3 市民権を得てきているワーケーションを「活用した」働き方

デジタルノマドに該当する働き方をしてきた自分自身もワーケーションには注目してきた。2010年代前半から広まったワーケーションという言葉の持つ意味も、この10年ほどの間にテクノロジーの進歩、働き方の変遷、社会情勢の変化を経て大きく変わってきている。もともとはヨーロッパでのいわゆるフリーランスが世界遺産等の観光地を働きながら

図1 緊急事態宣言未発出時に行われた2020年
11月体験会の参加者属性 (21名)



出典：(株) ふろしきや (2020) ワーケーションの今と可能性
分析レポートより引用

巡るという「自由かつクリエイティブな働き方のアピール・具現化」という要素が強かったが、その後働き方が柔軟な企業から、観光地で働くことで「テレワークエリアの拡大とスムーズな休暇への移行」という福利厚生に近い概念も内包されてきている。そして、リーマンショックなどによる景気指標が悪化すると正規雇用だけでなく雇用形態が増え、複業的な働き方が拡がり、さらに企業の生き残りをかけた新規事業創出やイノベーションを目的とした広範囲での交流ニーズも増えてきていた。そして現在の新型コロナウイルス感染防止に伴うテレワーク促進(働く場所の自由化)の波を受け、多くの人がワーケーションに目を向ける土壌が広がってきている。スマートフォンやPCの軽量・省電力化、通信環境の進歩も加わり、以前はほんの一部の人でしか実現できなかった働き方が一気に市民権を得た形だ。事実、昨年後半以降を見ると以前は大勢を占めたフリーランスや複業ワーカーだけでなく、新しい働き方を個人としても企業としても模索する中小・大企業に所属する社員や企業経営者が多くなり、新規取組みに対する視察目的の公務員を含めると多くの属性の人たちがワーケーションの場集うようになってきている。

「ワーケーションとは何か」という概念を超えて、「非日常的な環境で働き普段とは違う人や地域との出会いを味わう働き方」自体の良さを体感し、新しい働き方のメリットが広がることとなる。そうなるのとワーケーションできる人とできない人、できる職種とできない職種という概念を超えて、ワーケーションをすることで得られるメリットを最大化する

写真3 観光列車「ろくもん」を貸切って実施したトレインワーケーション風景



ために、必要な仕事を持ち込む流れができてきている。実際にあった興味深いワーケーションへの参加の仕方は、地元千曲市で働く70代のある農家が午前中に農作業を終えて、午後のトレインワーケーション（観光列車を貸切って移動しながらコワーキングするイベント）で今後のあんず産業の未来やあんず農園の今後の構想について、他のワーケーション参加者とディスカッションを始めた例だ。これは柔軟な発想が必要な「仕事」だけを切り出して開放的かつ自然体でいれる場面で取り組むという好例である。そして、こういったダイナミックな働き方は伝播する。コワーキングする場所を観光会館の中庭、市役所のオープンスペース、棚田の休憩所などに分散させることは前述した通り。観光関係者、行政職員、農家など普段自由な働き方に触れていない人が、場所にとらわれずに自立心を持って真剣に仕事に向かうノマドワーカーの姿を見ることは刺激となり、自分自身の働き方を考えるきっかけにもなる。そしてそれが相手の仕事の内容や人間的な興味関心に繋がり、人が交流する原動力につながっている。

4 ワケーションは「関係人口への入り口」となりうる

さらにワーケーションを通して現在まで起こって

きたことを整理すると、実に多くのことにつながっていることに気付かされる。今まで移住セミナー等で千曲市に興味を持っただけの人がワーケーションを通して数日滞在することで、ゆったりと働きながらその場所の空気感、水、匂いや人柄をより深く知り、移住するケースもある（お試し移住のような体験）。また、絶景のお寺でこたつを出しながらランチでご当地郷土料理弁当を食べ、ワーケーションでやりたいアイデアを出すアイデアソン（「アイデア+マラソン」マラソンのようにアイデアを出し尽くすまで出し合うワークショップイベント）を行うことで、その地域の良さを短期間で濃く知り、そこで真剣に意見を出し合った思い出から第2のふるさととして、個人的にも家族を連れての再訪に繋がるケースもある。また、ワーケーションで何度も訪れることで、その場所の地域課題に触れ、社会をより良くするプロジェクトも生まれている（地域の交通課題に取り組む温泉 MaaS [Mobility as a service] がその一つ）。また、ワーケーション参加者同士での会話から、応援したくなるような夢を語る人に支援が集まり、思ってもみない面白い構想が生まれるなど、意図を超える形での関係性の拡がりや深まり、そしてコラボが生まれ続けている。ワーク（仕事）+バケーション（休暇）も紐解くと「ビジネスとプライベート」が混ざり合うことであり、社会人と個人、仕事と趣味などの垣根を超えて、自然体で人が交流する舞台を作り出している。それにより人同士の深い関係とワクワクを起点としたコラボを生み出す環境につながっている。それを裏付けるように、交流型のワーケーション体験会における参加者へのアンケート結果を見ると、千曲市への再訪希望は全員が満点をつけ、そして驚くことに他地域へのワーケーション希望もほぼ全員が満点をつけており、広範囲に渡るワーケーションネットワークとも呼べる関係性を作る可能性を示唆している¹。このことから、ワーケーション自体はあくまで数日間～1週間

1 ワケーションに求められる出会いの要素と関係人口化への可能性については（株）ふろしきやとKAYAKURA 伊藤氏と共同での調査レポートを発表している。

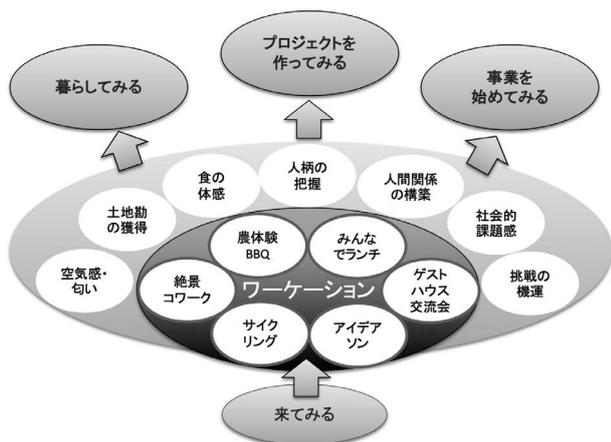
（株）ふろしきや（2020）ワーケーションの今と可能性 分析レポート

<https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000008.000020460.html>

伊藤将人（2020）ワーケーション体験会が参加者に与える影響に関する研究-長野県千曲市ワーケーション体験会を事例として、社会動向レポート vol 3, KAYAKURA.

<https://kayakura.me/kayakura-vol3/>

図2 関係人口創出に向けたワーケーションを入口とする概念図



出典：筆者にて作成

程度の限られた行為ではあるが、今の日本社会で必要な非日常の出会いの入り口となり、広範囲の地域との関係人口の創出という大きな役割を担う可能性を秘めている。

5 多方向からワーケーションにかかる期待と今後の展開

一時に比べるとワーケーションに対するブームも落ち着いたように感じられるが、受入側である自治体や観光事業者において観光地再生や地域活性の切り札としてワーケーションが語られ、新しく取組みが生まれているのを実感している。私がこれまでの実践で重要だと考えているのは、ワーケーション受入側が民間・行政が継続して協働し、来訪者側にもメリットある場を作るポイントは「出会い」「学び」を中心にする点であると考えている。それがあれば経済的な循環が回りだすという順番だ。オンライン上での交流や学びもあるが「生きた出会い（セレンディピティという言葉に置き換えられるような偶発的な素晴らしい出会い）」「生きた知識（人の熱を帯びた会話から得られる知識）」はまさに来訪者側も受入側も今最も求められている要素である。今私がワーケーション事業を手掛けている千曲市において、ワーケーション参加者が開発に参画する形で温泉 MaaS という「シンプルかつ便利」な交通アプリケーションの実証実験を必要な機能に絞ってスモ-

写真4 家族ワーケーションで実施した自由研究プログラム風景



ルスタートで始め、開発者業界でノウハウを広く共有していく取組みが生まれている。そしてさらに長野県と民間企業と普及活動を協働する形で「ゼロ・カーボン」をテーマとした出会いと学びの軸を新しく取り入れた取組みを始めている。豊富な水資源を活用した水力発電とそれを蓄電につなげる水素ステーション事業といった活動の認知度向上、また温室効果ガスを発生させる畜産に頼らない農産物やジビエを中心とした食事を形にする取組み、子ども自由研究に合わせて未来と環境問題を一緒に考えて形にするワークショップを実験的に行うなど、地域資源を活用しながらグローバルに向き合うべきテーマがワーケーションから生まれている。今後はより広い地域と協業しながら、この出会いで生まれたノウハウを多くのワーケーションに関わる関係者に共有していく活動を継続していきたいと考えている²。

いままでワーケーションをしたことがない人も様々な場所に訪れてより豊かなワークスタイルを体感してほしい。そしてワーケーションを受け入れている、もしくはこれから受け入れようとしている地域の方々も、まだ見ぬ出会いや学びへのワクワクとともにワーケーションという取組みを楽しんでほしいというのが願いである。

2 ワーケーションの実験的取組み紹介 WEB サイト：https://furoshiki-ya.co.jp/workation_lab/